

帝国主義の復活戦略

プラバト・パトナイク

ピープルズ デモクラシー 2025年3月2日

https://peoplesdemocracy.in/2025/0302_pd/imperialism%E2%80%99s-revival-strategy

ドナルド・トランプの外交政策は、コメンテーターたちを本当に混乱させている。ウクライナとガザに関して、前者では明らかに平和を追求し、後者では全住民の民族浄化を求めるなど、立場は著しく異なっており、世界情勢に対する彼の影響力が「肯定的」なものなのかどうか、わからなくなっているのだ。しかし、このような困惑の原因は、トランプが何かしたことにあるのではなく、帝国主義という現象を認識していないことにある。

米国を中心とする西側帝国主義が自らを窮地に追い込み、ウクライナ戦争を核対決にまで発展させるか、帝国主義の覇権を徐々に摩滅させるかという悲惨な選択を迫られたことは疑いようがない。ドナルド・トランプは、帝国主義をこのどうしようもなく厄介な窮地から脱出させようとしている。重要なのは、彼が「平和支持」なのか「戦争支持」なのか、あるいはヨーロッパの利益に配慮しているのか、していないのかということではなく、彼がこの袋小路から帝国主義を救い出す代替戦略を追求しているということであり、そもそも彼はこの袋小路を生み出した以前の政策に手を染めていないため、そうすることができる立場にあるということなのだ。

徐々に腐食しつつあった帝国主義の覇権を再び強化するための彼の方法は、エンジンと棒の組み合わせである。ウクライナ戦争を引き起こした挑発行為の根底にある基本的な仮定、すなわち、その結果ロシアを西側の独裁に屈服させることができるという仮定は、誤りであることが証明された。戦争中、ウクライナがどんどん領地を失っているだけでなく、「ルールを瓦礫と化す」はずだった対口経済制裁はまったく逆効果だった。ルールは一時的に下落した

後、対ドルでは制裁前よりもさらに高い水準まで回復し、しかもこの制裁は、ドルの覇権に対する挑戦を議題に載せるという反発を生み出した。

BRICS のカザン・サミットでは、「脱ドル」が重大な可能性として提起された。帝国主義による一方的な制裁は、少数の小国に向けられた限りは、かなり効果的である。しかし、多数の国々、それもロシアのように大きく、発展し、資源が豊富な国々を対象とした場合は、制裁としての効果を失うだけでなく、国際経済秩序として成立している支配的な帝國的取り決め全体に反対する国々によるブロックの形成を促してしまう。またその代替策は、制裁を受けていない国々さえも仲間に引き込む傾向がある。

これこそ、トランプが大統領に就任したときに直面した事態である。彼の「ニンジンと棒」の手法の「棒」の部分はよく知られている。彼は脱ドル化に向かう諸国に高関税をかけると脅したが、これは露骨な帝国主義的行為であり、資本主義ゲームのあらゆるルールに反している。ルールに従えば、どの国も貿易相手国がその意思を示せば、好きな通貨で貿易する自由があり、富を好きな通貨で保有する自由もある。そのような国に対して高関税を課して自由を制限することは、いかなる国際秩序も支持できない明白で露骨な腕力行使である。しかし、公然かつ容赦ない帝国主義者であるトランプは、そのような経済的強制力をはっきりと行使することに何のためらいもなかった。

ウクライナ戦争を終結させようとする彼の試みは、このニンジンと棒の手法におけるニンジンである。米国や西側帝国主義に対抗する代替の勢力圏を形成させないで、ロシアに不利にならない条件でこの戦争を終結させれば、ロシアはそのような代替勢力圏から外れることになる。それによって、帝国主義の覇権主義に挑戦する現在進行中の試みが弱体化することになる。

もちろん、交渉に基づくウクライナ戦争の終結は万人に歓迎されるべきだが、この終結を平和への願望、あるいは欧州の「安全保障上の懸念」を犠牲にして米国の利益を追求した結果と見るのは完全に誤りだ。そうでなければ、ガザについてまったく好戦的な発言をするはずがない。実際、資本主義はその本質からして平和に反対している。フランスの社会主義者ジャン・ジョレスが「資本主義は、雲が雨を運ぶように、戦争を内包している」と言ったのは有名な話

だ。トランプ大統領を動かしているのは、帝国主義の覇権をより良いものにしたいという願望であり、平和への願望ではない。同様に、欧州の安全保障の問題は、まったくのニシン（人を惑わす誤情報）である。欧州の安全保障がロシアによって脅かされたことは一度もなく、欧州を蹂躪する「ロシア帝国主義」の脅威という話はすべて、NATOの拡張主義を正当化するための口実に過ぎなかった。だから、トランプによる平和の動きによって欧州の安全保障が損なわれることはない。

トランプとヨーロッパの支配者たちとの違いは、帝国主義が現在追求できる2つの異なる代替戦略に起因する。ひとつは、袋小路に陥った古いバイデンの対ロシア侵略戦略であり、もうひとつは、ウクライナ戦争を終結させ、西側帝国主義の覇権主義に対抗するブロックからロシアを引き離すという代替戦略である。ヨーロッパの支配者たちは前者に固執しているが、トランプは後者を試みている。ドイツのネオナチ「ドイツのための選択肢 (AfD)」がウクライナ戦争に反対しているのも、まったく同じ観点から見る必要がある。パレスチナに対する極端な攻撃性と対照的に、ウクライナ戦争の終結を望んでいることは、平和に対する一般的な願望でも、「ヨーロッパの安全保障」に対する無関心でもなく、ある戦略的立場を示しているのだ。

もちろん、帝国主義を窮地から脱却させるというトランプのプロジェクトは、同時に帝国主義圏全体に対するアメリカの覇権を強化する戦略でもある。彼のスローガンである「アメリカを再び偉大に」は、西側帝国主義が支配する世界を、アメリカをリーダーとして疑いなく再現するプロジェクトである。それは、アメリカの "ディープ・ステート " (影の政府) によるとされる、ロシアからヨーロッパへのガスパイプライン、「ノルド・ストリーム II」の爆破に代表される、ヨーロッパをアメリカのエネルギー源に依存させる戦略の、この意味での継続である。

しかし、トランプの戦略には大きな矛盾がある。資本主義世界の「指導力」には代償が必要であり、トランプはこの代償を払うことなく、米国の「指導力」の役割を求めている。その代償とは次のようなものだ。「指導者」は、他の主要資本主義国の野望を受け入れ、資本主義世界全体が危機に陥るのを防

ぐために、対米貿易赤字を容認しなければならない。これは、英国が「指導者」であった時代に行ったことであり、最近の米国が行っていることでもある。当時、他の大国であったヨーロッパ大陸やアメリカに対して貿易赤字を垂れ流していたイギリスは、特に、植民地帝国に対する目に見えない収益の黒字を主張することによって、この赤字と均衡を保っていたからである。その黒字の大部分は、征服したこれらの植民地から「排出」させたもので、それによって他の主要資本主義国との赤字を清算した、でっち上げられた黒字であった。

しかし、戦後の米国は同じような「幸運」な立場にはなかった。他の大国に対して貿易赤字を垂れ流しているため、ますます負債が大きくなっている。トランプ大統領は「アメリカを再び偉大にする (MAGA)」戦略の一環として、すべての貿易相手国に対して関税を課そうとしているが、資本主義世界経済の全体的な需要が拡大していないのが現状だ。それは、グローバル化した金融資本が、あらゆるところで政府支出を拡大する財政赤字や富裕層への課税を避けるよう圧力をかけているためだが、（関税強化は）世界資本主義の危機を際立たせるだけであり、特に米国以外の資本主義世界に重い負担がのしかかる。

それゆえ、帝国主義復活を目指すトランプの戦略は、一挙両得をめざすということになる。米国のリーダーシップを主張する一方で、他国には関税を課そうとするのだから、この試みは、世界の他の国々に対する「隣人窮乏化」政策に等しい。このような「窮乏化政策」は、他国から市場を奪い取ることで自国の成長を確保しようとするものであり、帝国主義の覇権を再び強化しようとする計画とは根本的に相容れないものである。バイデンが帝国主義を一つの隅に追いやったとすれば、トランプが帝国主義をその隅から追い出そうとしても、帝国主義を別の隅に追いやることにしかならない。（了）

筆者の **Prabhat Patnaik** は、インドの政治経済学者、政治評論家。著書に『資本主義下の蓄積と安定』（1997年）、『貨幣の価値』（2009年）、『社会主義の再構想』（2011年）などがある。

ピープルズ・デモクラシーは インド共産党 (M) 機関紙。

【翻訳チェック 田中靖宏】